

作家インタビュー

美術手帖 2015年9月号 ART NAVIより

野路千晶 = 文

吉次史成 = 撮影



市井の「もの」に捧げるドキュメント

一列に並んだ掃除用モップ、無造作に立てかけられたタイヤのホイール、あるいは光沢のあるバイクシート。福永大介がモチーフとして選び、描くのは、取るに足らない、ある目的のためだけに機能する日常の道具たちだ。

小山登美夫ギャラリー東京で9月12日より開催する新作展のタイトルは「Documenting Senses -イヌではなくネコの視点によって-」。福永の視点は、気ままに街を回遊するネコのそれとして副題で表される。「建物の裏側、路地裏、バックヤードなど、表からは見えない場所に惹かれます」。そうしたスペースの一角で、つい「見つけてしまう」というモチーフは、表現主義を思わせる豊かな色彩によって絵画化される。「色をたくさん使っているけど、自分が大切にしているのは全体のトーンだと思います」。福永の話す「トーン」には、色調だけではなく、自らの感情、印象といった意味も含まれる。「ものから感情を汲み取ると同時に、自分の印象や感情を反映させています」。商業施設の一角に置かれたモップ、あるいは国道沿いに殺風景に打ち捨てられるホイールは、作家との交感を経て、あたかも擬人化されたように固有の佇まいを放ち始める。しかし、表現においてはあくまで「あるがままの姿を描いています」と言う。その姿勢によってもたらされるものは、いわば道具たちの「ポートレート」だと言えるのだろう。だが、より最適な言葉として、作家は「ドキュメント」を選ぶ。福永による絵画作品は、イメージや意味の顕れである以前に、自身の感情の機微、対象への感応をとらえた高精細な記録となっていく。色鮮やかに彩られた、ありふれた「もの」が見せる姿は、まぎれもなく福永の視座そのものなのだ。